

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1427号 令和8年2月15日号

第51回衆議院選挙 結果は「高市承認」	本紙編集部	1
中国は台湾攻撃をするのか		2
アメリカに旋風を起こす「サンダース待望論」		3
果たして過疎は防げるのか？		4
AIと人間の脳はどちらが優秀か？		5

本社 〒847-0871 佐賀県唐津市東大島町19-5
電話 090-3199-8446 no.shin.7771008@gmail.com
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

発行所
中央情報通信社
編集長/谷田 透

3月は発行をお休み致します

第五十一回 衆議院選挙 結果は「高市承認」

本紙編集部

衆議院選挙は二月八日の極寒大雪の中で投票が行われ、全国で五〇%を超える投票率を叩き出して自民党・高市政権が圧勝した。得票率が六七%ということだが、これは驚異的な数字である。党内反対派も多いのだが、しばらくは黙らざるを得なくなる。

大阪以外の全国で、高市総理が駅前立つと黒山の人だかりが出来た。党の関係者によれば、これほど多く人が集まるのは小泉総理以来だとのこと。若者が多かったことも共通するようだ。つまり「ブーム」なのである。

「減税」と「積極財政」を合わせ技で公約にしたところも利口だが、対中外交問題を内政問題に抱き合わせたとところも気が利いている。四月以降の予算執行が楽しみだが、早く世間に金が回るようにしなければ、「高市ブーム」は下り坂になる。減税も良いが、手許に金が回るようにしなければ庶民の暮らしは上を向かない。

選挙の世界の「三日、三月、三年」とは、まず三日すると世間の熱は冷めて、三月すると政策実行の経過が問題視され、三年すると支持が変わるといふ。議員の方でも、三日すると自分の力と勘違いし、三月すると党や後援者の恩を忘れ、三年すると愛国心や正義感も薄くなる。早め

に高市政権が公約に適合した手を打ち続けないと、関係者以外は興味を持たなくなってしまう。

自民党に対して中道改革連合の悲惨な結果は世間を驚かせた。公明党関係者によると、今まで創価学会を邪教だ悪魔だと言っていた立憲と握手するのは地獄行きの切符を買うことに等しいという学会員の声が、政党の存在感という理由で無視された結果だと自嘲的だった。これは立憲側にも同じ裏返しがあったのだから。

二月九日の選挙後初の株式市場は「寄り付き天井」という形で、フィバーという浮かれた動きはなかった。これは高市政権に「今までの政策を進めるように」という信任の意味がある。

海上自衛隊にオーストラリア海軍、イギリス海軍が協調して、海の安全を脅かす中国海軍に対抗する動きには、アメリカ第七艦隊も協力することになる。南鳥島沖のレアアースは安心して同盟国が配できる。台湾も安全が守られ、フィリピンも中国からの脅しが激減することだろう。

選挙結果という民意が「高市承認」「政権信任」したということは、少なくとも三年間ほどの安定を保証することになるかもしれない。



中国は台湾攻撃をするのか

中国の軍事委員会は習近平の意見で政策を決めるのだが、「二〇三五年までに祖国統一する」と第十五次五カ年計画で決定し、台湾を「戦争という手段を含めて」合併することにしている。

習近平は孫子の兵法を金科玉条としており、自分より大きくて強い者つまりアメリカ軍とは戦争しないことにしている。「大きい者は強い、強い者は正しい」という習近平は、中国解放軍の体制と能力がアメリカ軍と肩を並べるところまで進歩しなければ戦わないが、並んだらすぐに戦争を始めると豪語している。

つまり現状では、台湾にアメリカ軍基地が無いしトランプ大統領も中国と戦争してまで台湾を守る気がないなら、台湾の世論を操作して対中感情をやわらげ、投資と交流で台湾人を骨抜きにして「中国帰属政策の国民投票」に持って行きたいと考えている。台湾に倍する軍事力を見せつけ、戦争になれば台湾人は殺されると思ひ込ませておけば、見せかけの餌に釣られて台湾世論は自由に操れると思っている。



中国は七大軍区から五大軍区に改編され、台湾や日本を攻撃するのは東部戦区になっている。この東海艦隊に空母打撃軍を作ったことを、台湾に見せびらかす演習をした。

空母「福建」には電磁式カタパルトを装備しており、天候に左右されず艦載機が飛び立てると大見得を切ったが、この技術はフランスからのスパイ情報だったと言われており、ステルス技術にもスパイが大金を使ったと話題になっている。

この空母を撃沈させる為の対艦ミサイル

を台湾はアメリカに供与してくれと頼んでいるが、トランプは最新型の高性能ミサイルは供与しないらしい。どうやら習近平とのディールのネタらしいが、今のところ習近平は「台湾のミサイルの数より多くの無人爆撃機（ドローン）を飛ばしてやる」と平然としているらしい。ディールだと分かっていいるから、習近平は強気で押せる。

その習近平も公然と反旗を翻した中央軍事委員会副主席の張又侠（写真右端）をクビにしてから、次々と軍幹部が反対側に回る動きを見せたために党籍剥奪する騒ぎになっている。

東部戦区司令官で台湾方面担当幹部の林向陽、統合作戦指揮センター副主任の王秀斌、ロケット軍司令官の王厚斌をたて続けにクビにして、軍幹部で中央委員の党籍剥奪者だけで十四人に上った。そのうち、人員補充されたのは十一人だけで、後は人事に穴が開いたままだ。

中央委員全体では、二〇五人いたものが、一六八人に減少している。中央軍事委員会も、指導部の七人から三人がクビになっている。二〇一七年には中央軍事委員会書記の孫政木もクビにした。中央政治局では、軍幹部の汚職が問題になり、中央軍事委員会副主席の河衛東と同委員の苗華をクビにすることになったが、河衛東は二十四人の政治局員の一人なのだ。それに連座して、軍の高官九人が党籍剥奪の処分になったが、全員が最高位の上将だったという。

鯛や鯖は腹から腐るが、鯛は頭から腐るのである。トランプ大統領は頭から腐った鯛を料理するつもりらしいが、現実路線の台湾では「食中毒が怖いから腐った鯛は捨

てる」と思われる。

ところが台湾には今も「蒋介石の亡霊」が存在し、大陸反攻・共産党撲滅を真剣に語る人たちがいる。それらは国民党関係者なので「台湾人は中国人だから大中華を台湾人が復興するのだ」とラップを吹いている。李登輝が総統になってから生まれた「台湾ナシヨナリズム」は、蒋介石の主張を信



破壊された蒋介石像

じ切っていた守旧派の国民党員には馬の耳に念仏だった。そのため標準語として台湾語が解禁されてからも北京語を使い続け「我々中国人は…」と話すのをやめなかった。台湾は日本が清朝から戦争で奪い取ったものだと言いつつ続けた蒋介石は、日本と仲良

アメリカに旋風を起す

昨年から一層激しさを増した「トランプ劇場」だが、世界的にもう限界だという声が大きくなってきた。国際法は認めつつも、それを守る気は全くなく、「国際法違反を取り締まる機関も罰する組織も存在しない法など無意味だ」と言い放っている。

今までのアメリカ大統領なら、建前でも国際法を守り国連機関を守ると言っていたのに、世界の保安官という職務も放棄し、同盟国にさえ踏み絵をさせるような情け知らずをトランプは繰り返ししている。それでもアメリカ共和党支持者の中の岩盤支持層に支えられて、トランプは大統領権限を益々大きくさせることに余念がない。

アメリカの現状は、インフレで家賃と食料品の物価高が直撃する中流以下の国民（全体の六〇％）が行き詰まりを訴えるようになってきている。ところが、共和党政府には聞く耳がないし、トランプ改革を恐れる地方政府も対策すら立てられていない。

そんな中ニューヨーク市長選挙では、大統領からの嫌がらせや圧力をものともせず、

くしていた先住民十六部族を被差別民に落とし、日本名や日本風のものなど一切を認めなかった。

台北で死去した日本特務の父・明石元次郎大佐の墓を土で埋めて、その上に漢民族の墓を建てた。蒋介石から利益や恩恵を受けていた人々は、台湾は中国の別宅だと言いつつ回るが、それらが中国共産党から利用されるのは当然のことだろう。

中共が「蒋介石の亡霊」たちをベースに宣伝工作や情報操作を繰り返し、貧乏人に現金をばら撒けば台湾世論はどうなるか分からない。つまり、戦争する前に「友好の白旗」を掲げる可能性さえ考えられるのだ。ただ結論として習近平の性格、中国解放军の実情、台湾の民心などを考え合わせれば、現時点で中国の台湾攻撃を考えにくいと思われる。

「サンダース待望論」

民主社会主義者のマムダニが当選した。これこそ民意であり、トランプ大統領に対する警告なのだと多くの国民が感じ始めた。いくら民主党が強い東部でも、「世界で最も豊かな国で六〇％の国民がギリギリの生活をして、病気になるっても医者にも行けないのは政治が悪い」と露骨に国家に反旗を翻したマムダニが市長になったのは驚きである。

そのマムダニ市長が師と仰ぎ、民主社会主義の希望の星と考えているのがバーニー・サンダース（写真次頁）である。

バーモント州選出の上院議員で八十四歳のサンダースは、アメリカを支配している億万長者たちを敵だと批判し続け、トランプ大統領たち寡頭権力を排除せよと叫び続けている。彼は無所属議員という珍しい立場で、基本的に「貧乏人と弱者の味方」であり、筋金入りの左翼政治家である。

サンダースはポーランド系ユダヤ人で、十七才の時にアメリカに移住してきた。ブルックリンの安アパートで育ち、貧困層として生きてきた。シカゴ大学を卒業後バー

モントに移り、そこで政治活動を始めている。一九八一年に無所属でバーリントン市長になり、一九九〇年には下院議員に、そして二〇〇六年には上院議員に選ばれている。二〇一五年には無所属のまま民主党の大統領予備選に出馬し、「国民皆保険」を中心政策に掲げ、労働者層と貧困層の圧倒的支持を得た。二〇二〇年にも同様に再出馬したが、今度は当選しそうだと危惧した共和党・民主党の現職議員たちがバイデン支持に乗り換え、バイデンが大統領になったという経緯がある。



アメリカ政治は、理想としては民主社会主義を目指すのだが、本音のところでは「自分たちは豊かに暮らしたい」という強欲資本主義が体に染み付いているのかもしれない。教会の炊き出しでも、何人に何食配給したかを競うようなところがあり、教会には事情があって来られない真の貧困層の方は見えないようだ。

現在のトランプ大統領の政策が全て間違っている訳ではないのだが、その政策の説明をしないことは致命的だ。例えばグリーンランドの問題も、北極同盟をロシアと中国が乗っ取る計画でグリーンランドに投資して軍の基地を作ろうとしているが、

果たして過疎は防げるのか？

昨年の「熊問題」によって、農産林や里山の過疎問題がクローズアップされている。

二〇〇〇年頃からは、平均年齢が六十五歳以上の住民が半数を越えている所を「限界集落」と呼ぶようになり、年々深刻さを増している。二〇二四年に全国で約三万箇所だった限界集落だが、二〇二五年には約四万箇所になった。この傾向は急速に進んでいる。

兵庫県内に限っても、過疎地域とされているのは宍粟市、養父市、洲本市、淡路市、多可町、神河町、市川町、佐用町、香美町、

「NATOは足並みが揃わず守れないからアメリカが出ていくのだ」としつかり説明すれば良いものを、中国の貿易で得をしたいフランスの意見にEU全体が引き摺られそうだと判断すると「ではアメリカが領有する」と短気を起こす。ベネズエラも似たようなもので、結局トランプの短気を支持するのは、周辺に居る億万長者の「金儲け至上主義者」だけになるかもしれない。財閥が支持するならば、共和党支持者の多くは「それが正しいのかな…」と思うようになり、教会などは寄付の金額によって賛成の旗を振るのだと言われている。

世界は「ジャイアン」がいくら強くて恐ろしくても、すべてに同調するものではない。逆に、民主制の自由主義国では了解できる事しか同意しない国民性が出来上がっており、トランプの痛恨な一幕が終わり第二幕に舞台が回った今、うんざりして食傷気味になっているように見えるのだ。

その結果「貧乏人の味方」「億万長者と寡頭権力者を敵として戦う政治家」のサンダースが待望されるようになったのだ。この民心の変化は今後恐らくポディブローとなっ

てじわじわと効いてくることだろう。新温泉町だが、人口が減り続けていることに対する根本的な改善策は無いようだ。

人が里山に入らなくなり、鹿や猪が我が物顔に里山を支配するようになり、里山から村に出てくるようになって、過疎地では対応するためのマンパワーそのものが手当て出来なかった。「自然が残っている」から「荒れ放題」になるのは時間の問題になり、もう住民の力だけでは何も対策できなくな

るので。国による過疎対策は一九七〇年に「過疎対策緊急措置法」が作られ、二〇二一年に

は「過疎地域発展支援特別措置法」に進展し、雇用創出、デジタル化推進、子育て支援、交通手段確保などに予算がつけられた。

兵庫県でも産業振興と生活基盤整備を中心に、移住の促進で交流人口の増加を図っているのだが、「人口が少なくても安心して暮らせる」というコンセプトは進められていない。



道の駅を作ったり、名産品の改良による宣伝など工夫をこらしても、ドライブがてらに立ち寄る人口を増やすことに少し貢献する程度で、過疎地域を「どうするか、どうしたいのか」という目的地は見えないまま

AIと人間の脳はどちらが優秀か？

AIには喜怒哀楽が無い。スピルバーグ監督の名作映画「AI」の中の台詞が本質を言い当てている。主人公のAIロボットが言う「ボクたちは泣くことは出来るが悲しむことが出来ない」。

AIが人間の脳に勝てないのは、人間の脳には「情動」というものがあるからだ。もしそれをAIが身に付ければ、鉄腕アトムは誕生する。

さて、二〇一六年にAIの囲碁最強プログラム「アルファ碁」と対戦したトッププロのイ・セドル九段（写真）は、第三局まではAIにケチヨンケチヨンにやっつけられ、第四局になってから捨て身の手筋で石を置くとAIはデータにない手筋なのでバグってしまった。イ・セドル九段が勝った。人間の感情は、負けるとわかっていても捨て身の戦術が取れるが、AIは勝ち筋のデータに従う戦術しか取れない。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と人間脳は考えるが、これこそAIに無い情動なのだ。

AIは集中型の人工知能だから、莫大な電力消費でデータセンターを動かせば全てのデータを瞬時に呼び出せる。ただし、経験値が皆無であることと実感記憶が皆無で

まである。

国土の安全、保全、愛国心、愛郷心という面を重視していた安倍政権の時代にも、過疎に対する根本的な対策は見つからなかった。

古代から集落ができることには理由があり、その理由がなくなれば集落からは人が出ていく。生きていく上での必要に応じて集落は生まれ、そして滅ぶものである。千年続く集落には一千年続く理由があり、政治的に無理矢理、強引に存続させねばならない集落には、人工的な政治理由しかない。始まりのあるものには必ず終わりがあがる。過疎地域の集落を「上手に終わらせる」という政策が語られる必要性が高まってきたのではないだろうか。

あることを理解していなければ、AIが神だという間違いを犯すことになる。



またAIには、人間のように「嫌なことは忘れる」「想い出はデフォルメして美化しよう」などという技術がない。忘れることもデータを粉飾することも出来ないのだ。

百科事典を丸暗記できる人間脳はないが、AIの場合は電力さえあればデータ量はキャパの範囲で詰め込める。ところが経験という人間が勝っている分野では、AIのデータをいくら駆使しても「あの日の夕焼けの美しさ」も「あの時のコーヒーの味」も数値化した平面データでしか再現出来ないのだ。喜怒哀楽・情動という人間脳の凄さは、実はボーっとする無意味な時間に育てられている。ボーっとすることのない人は、情緒不安定の予備軍であると同時に、AI依存症予備軍となってAIに支配される。

人間の脳には、情動というAIが百年たっても追いつけないような優秀さがあることを自覚して、AIと上手に付き合っていく人間にならねばならない。